2024年6月9日

2024年度　オンライン研修
「多様性が活きることばの教育」

研修A
「文化間移動をする高校生の日本語指導」

第1回　進路選択で重視される「日本語の力」
―日本語能力試験へのチャレンジ―

趣旨説明

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

研修A 「文化間移動をする高校生の日本語指導」

研修A全体の趣旨

文化間移動を経て、多様な言語的文化的背景をもつ高校生が、その多様性と、それまでに培ってきた力や経験を発揮しながら社会に参画し、キャリアを開拓していくためのことばの力を育む教育について学びます。「特別の教育課程」による日本語指導の制度についての理解、制度を活用した外国人生徒等のための指導計画、指導・支援の内容構成を検討します。そこには、日本語はもちろん、教科等の学習、母語・母文化の獲得や多文化共生、そして、進路選択や自己実現のための教育・支援が含まれます。外国人生徒等が直面する問題・課題場面を想定し、具体的な事例とともに理解を深めましょう。

第1回　進路選択で重視される「日本語の力」
―日本語能力試験へのチャレンジ―

「特別の教育課程」により日本語指導を実施する場合、教科等の学習、社会的活動への参加、キャリア教育等と関連付けた学習活動として日本語の指導計画を作成することが期待されます。

高等学校卒業後の進路選択には、日本語の力が大きく影響します。法務省は、高等教育機関等へ入学するための日本語能力に関し、日本語能力試験（JLPT）のN2合格等を指標として示しています。本研修では、JLPTのための日本語指導を「個別の指導計画」に位置づけ、教科学習・社会参加のための教育・支援活動とを関連付けて実施することの重要性を検討します。試験のために日本語の知識を学ぶに留まらず、教科等の学習に関連付け、それを運用し問題解決する力を向上させるための学習として授業をデザインする工夫について考えます。

加えて、「特別の教育課程」による日本語指導を実施している高等学校に、具体的な指導体制や指導内容について報告をいただきます。

本研修用動画の内容は、本学が受託した文部科学省「高等学校における
に日本語指導体制整備事業」（令和4年・2022年度）の二つの成果物に基
づいています。詳細は、直接アクセスしてご覧ください。

『高等学校における外国人生徒等の受入れの手引』

高等学校における外国人生徒等の受入れの手続き、日本語指導の仕組み、支援体制作りに関する考え方や事例、そして関連する情報で構成しています。

https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_tebiki.pdf

『高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』

日本語指導、教科指導・教科学習支援、キャリア教育、多文化共生教育に関し、具体的な内容構成や実施方法を提案します。本事業で実施した調査を通して収集した具体例や実践・取り組み事例、また、関係者の声なども採録しています。

https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf

「特別の教育課程」の編成による日本語指導

－日本語能力試験（JLPT）の学習を、「個別の指導計画」に位置づける－

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

1　日本語の学習

⇒　自律的な生涯学習者
進路選択のするための力を育む

課題３　外国人生徒等の社会参画・キャリア支援の充実

高等学校の出口である進学・就職は、生徒にとっては社会参画のスタートともなります。生徒のキャリア形成を念頭に地域の社会・産業構造、就業・進学の仕組みなどの具体的な学習とともに、社会的存在として自己認識を形成する教育を行います。　**『手引』p.12**

外国人生徒等が、自律的・主体的な生涯学習者となる

目標の設定と学習計画を立てる　　学習成果を可視化する

進学のために・就職のために、進路の幅を広げ、選択できる日本語の力を育む

希望する進路に必要となる日本語の運用力を高める

自身の日本語の力を公的に示す

社会的認知度の高い標準化された試験日本語能力試験(JLPT)等を日本語指導に組み込むこと意味

日本語能力試験（JLPT）の概要

https://www.jlpt.jp/reference/pdf/guide_2024.pdf

課題遂行のための言語コミュニケーション能力を測る

①日本語の文字・語彙、文法についてどのくらい知っているか。 ⇒科目：言語知識（文字・語彙・文法）

②その知識を実際のコミュニケーションでどのぐらい使えるか。 ⇒科目：読解と聴解

	認定の目安	
N1	幅広い場面で使われる日本語を理解することができる	難しい
N2	日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる	↕
N3	日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる	
N4	基本的な日本語を理解することができる	易しい
N5	基本的な日本語をある程度理解することができる	

N1・N2の試験科目
「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」
「聴解」

N3、N4、N5の試験科目
「言語知識（文字・語彙）」
「言語知識（文法）・読解」
「聴解」

詳細・問題例等やウェブサイトで
https://www.jlpt.jp/index.htm

JLPT　N1～N5　目安の詳細
https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html

日本語能力試験公式問題集（2018）より問題例（N3）

言語知識（文法）問題1
https://www.jlpt.jp/samples/sample2018/pdf/N3V.pdf

読解　問題4
https://www.jlpt.jp/sample2018/pdf/N3R.pdf

N3の認定の目安「読む」

・日常的な話題について書かれた具体的な内容を表わす文章を、読んで理解することができる。
・新聞の見出しなどから情報の概要をつかむことができる。
・日常的な場面で目にする難易度がやや高い文章は、言い換かえ表現が与えられれば、要旨を理解することができる。

文法…教科書等でよく利用される表現（複合辞等）の知識が問われている。
読解…学校生活でも起こりうる場面で「書かれたもの」を理解する力が問われている。

知識を覚えさせるだけでは不十分。
現在の生活・学習場面、進路選択後に直面する課題や問題に関連付けて運用力を高める授業を！

日本語指導の質的改善の必要性

課題２　計画的組織的な指導・支援による日本語指導の質的改善

日本語指導及び教科学習支援を、高等学校の様々な教育活動・学習体験と関連付け、生徒の置かれている状況に応じて、問題の解決や課題の達成により自己実現するための力を育む教育を行う。そのために、生徒一人ひとりの実態の把握を適正に行い、個々のニーズに応じて指導計画を設計し実施する。さらに、定期的に学習評価を実施し、計画、実践、評価、改善を重ねながら実施する仕組みをつくる。

特に、日本語指導においては、言語知識・スキルにのみに意識が向けられることなく、また近視眼的な就職や進路の選択支援に終わることなく、母語や母文化等の文化的多様性を発揮しつつ日本語を使って自身の道を切り拓く若者の教育として具現化されることが必要である。

『手引』p.12

２　日本語能力試験（JLPT）のための学習を進路・キャリア教育・教科学習等と関連付ける

個別の指導計画（「特別の教育課程」を編成する場合）
　指導内容として、日本語指導・及び、進路・キャリア教育、また、教科等の学習に関連付けて、日本語能力試験（JLPT）の学習を実施

<table>
<tr><td colspan="3">外国人生徒等への支援・指導</td></tr>
<tr><td rowspan="5">履修計画</td><td rowspan="4">個別の指導計画</td><td>「特別の教育課程」による日本語の取り出し指導・放課後などの日本語指導</td></tr>
<tr><td>外国人生徒等を対象にした日本語等に関する学校設定科目</td></tr>
<tr><td>教科の取り出し指導・教科の授業への入り込み指導</td></tr>
<tr><td>進路指導・キャリア教育、母語母文化教育、多文化共生・社会活動参加への支援</td></tr>
<tr><td></td><td>教科等の授業</td></tr>
</table>

3　日本語指導のプログラムに JLPTの学習を配置

・言語知識（文字・語彙、文法）の学習は、プログラムBの日本語基礎に
・それらを運用する読解・聴解の学習を、プログラムC（技能別）やプログラムD（プロジェクト）で

プログラムA
　来日後の日
　ラム。日本語

プログラムB 「日本語基礎」
　日本語の基礎的な構造・意味・機能を理解し、生徒の生活場面や学習場面で運用できるようになることをねらいとする。日本語基礎は日本語の学習経験がない生徒を対象とし、順にⅠ→Ⅱ→Ⅲと積み上げて学ぶように構成されている。

プログラムC 「技能別日本語」
　まとまりのある内容の文章・談話を聞いたり、話したりする力、そして、読んだり書いたりする力、を高めるプログラム。タスク（課題）を設定し、そのタスクを遂行するプロセスで、学習した日本語の基礎的な構造・意味・機能に関する知識を活性化し運用することを促す。

プログラムD 「日本語プロジェクト」
　外国人生徒が共生社会の一員として自己を実現し、よりよい社会をつくるために、実際に問題・課題を解決する活動（プロジェクト）を通して、思考し、判断し、表現するためのことばの力を高めることをねらいとする。

日本語の技能とその運用のためのプロジェクト型の指導を中心にする計画で

<タイプB（来日3年、生活言語能力があり、学力・母語は学年相応）の生徒の場合>

・学習参加のための日本語の力として日本語の各技能の発達と、その力を実際の問題解決など必要な日本語の運用力を育むイメージ

・基礎的な力が不十分であれば、プログラムBで手厚く

	1年	2年	3年	4年
プログラムA「生活のための日本語」				
プログラムB「日本語基礎」				
プログラムC「技能別日本語」				
プログラムD「日本語プロジェクト」				

1年：JLPTのN3に挑戦　プログラムBで文字・語彙の学習
プログラムCで読む・聞く学習

2～3年JLPTのN2に挑戦　プログラムB・Cで文字・語彙の学習
プログラムDで読む・聞く学習

プログラムB（日本語基礎）：
表現の学習後に、その表現を利用して、教科の図表・絵図等を読み取り表現する。

プログラムC（技能別）：
学校の掲示物、学校からのお知らせ・通知について、内容構成のパターンを分析し、読み取る。

多文化共生の活動として：
読み取った学校の通知文を、後輩が利用できるように母語訳を作成したり、易しく書き換える。

次の講義で
関連情報で
さらに明確化を
砂川高等学校の報告で
具体例を